インタビュー 第一線で活躍する女性

挑み続けた世界の貧困問題

撮影:鈴木慶子

西水美恵子 世界銀行元副総裁

にしみず・みえこ――大阪府生まれ。都立西高校在学中、姉妹都市高校生親善大使としてニューヨークへ。その後、ロータリークラブの高校留学生として再渡米。ジョンズ・ホプキンス大学で博士号をとり、プリンストン大学経済学部助教授を経て、1980年世界銀行入行。1997年南アジア地域担当副総裁。2003年世界銀行退職後は世界を舞台に執筆や講演、アドバイザリー活動を続ける。著書に『あなたの中のリーダーへ』(英治出版)など。

人の世に変わらぬものは変化のみ

――世界銀行（以下、世銀）退職後も、ずっと海外にお住まいだそうですね。

西水 アメリカの首都ワシントンとカリブ海の英国領バージン諸島に拠点を置いて、いまは年に二度ほど帰国しています。主に講演会や、最近では企業でのリーダーシップ研修の講師役にお誘いいただくことが多いですね。

――ブータンともご縁が深いとお聞きしています。

西水 先代国王、雷龍王四世とのお約束なので、年に一回は自費で行きます。各界リーダーの悩みの聞き役というところでしょうか。

二〇〇三年に世銀を退職するまでの二十三年間、世界各国を訪れましたが、ブータンを初めて訪ねたのはかなり遅かったのです。それも当時の私は発展途上国を筆頭に経済を蝕む腐敗政治に嫌気がさし、世銀の存在意義に疑問を抱いていた時期でもありました。

――ブータンといえば、国民総幸福量という言葉で、最近は日本人に馴染みが深いですね。

西水 日本では長閑で幸せな国だと考えられているようですが、実際はそんな生半可なものではありません。ブータンは人口七十万にも満たないのに、およそ十二の異民族を抱える多民族国家ですから、国家経営を誤るようなことがあれば隣国の中国やインドに潰されてしまうリスクが常にあります。

雷龍王四世はこの難題に本気で取り組んでおられました。世界を見渡せば、どの国家にでもバラバラになるリスクがある中で、雷龍王四世ほど危機管理的な国家戦略を念頭に置くリーダーは、私にとっては稀有な存在でした。実際、出会いそのものからして異例でしたから。

――異例というのは。

西水 初めてブータンを訪問したのは、副総裁になってからのことでしたが、外交儀礼上、総裁でもなければ陛下に謁見を賜りたいなど、言えません。

ですから国王にお会いするつもりなど毛頭なく、これはどの国でも初訪問で必ずしていたことですけれど、空港から寒村へ直行して、農家に滞在するという旅程だったのです。

第一線で活躍する女性

ところがブータンのパロ国際空港に出迎えてくれた大蔵省次官が、おもむろに「明日、陛下が謁見を賜るとのご命令だ」と……！

――突然の展開ですね。

西水　新任の副総裁が日本人で、そのうえ女性だから、お珍しいのだろうというくらいに思っていたのです。でも謁見後に大蔵大臣が教えてくれたのですが、陛下は私の旅程を事前にご覧になって、「この副総裁は、本気で我が民のために尽くすつもりだな」とおっしゃったそうです。

　初めて陛下にお会いした時、開口一番、こう仰せられました。「人の世に変わらぬものは変化のみ」。

　絶対王制から民主制への政治改革を先導しておられたのですが、国民は猛反対。「無常」だからこそ改革は先取りするのが賢いと、国民を説き回っておられたのです。具体的な取り組みについてお話しくださったのですが、私はその一所懸命さ、本気で国民のことを考えて事をなさるお姿に胸打たれました。そこにはご自身の地位への固執など微塵もありませんでした。

　当時、世銀の組織文化を変える改革を始めたばかりで、風当たりが強く、随分悩んでいたのですが、陛下のそのお言葉がストンと心に落ちました。どのような環境に置かれようとも、一所懸命に、成長し続ける組織文化の種を一粒でも蒔けばいいのだと。

　そうしたら急に心が軽くなって、無礼にも、御前でクスクス笑い出してしまったのです。陛下は、面白そうにご覧になっておられましたけれど(笑)。それからのお付き合いです。国王陛下は私にとってただ一人の「メンター」です。

世界銀行へと導いた少女ナディア

――世界銀行にはどういういきさつで入られたのですか。

西水　実は私、高校生の時に日本を脱出しているのです。

――脱出、ですか。

西水　そう。当時は大学卒業までは男女平等で進めるのに、卒業後の女性の進路は絶壁というか、選択肢が極度に狭まる。それが不満でした。女性は幸せな結婚が一番だという考えを受け入れることができなかったのです。

　東京都と姉妹都市のニューヨーク間で毎年男女一名ずつ高校生が選ばれ、一か月ほど親善大使として訪問する制度があります。そのおかげで初めてアメリカを知りました。その後、ロータリークラブの高校留学生としてまた渡米しました。アメリカは私にとって別世界でした。本当は一年で帰るはずが、アメリカの大学にも受かったものですから、奨学金をとってそのまま滞在し続けました。もう家出同然です(笑)。

――大きな転機ですね。

西水　でも、もっと大きな転機がありました。それはプリンストン大学経済学部の助教授時代のことで、その年の夏から始まる一年間のサバティカル（研究休暇）を世界銀行の研究所で過ごさないかというお誘いを、世銀の副総裁から受けたことがきっかけでした。

　世銀については無知同然でしたが、好待遇だったことに惹かれて受けたのです。ただし、一つだけ条件が課されました。

――それはどんな条件ですか。

西水　一国でもいいから、発展途上国の貧しさを自分の目で見てくるように、という条件です。

　世銀で活躍していた教え子に相談すると、それならエジプトがいいと誘ってくれたので、彼の仕事先でもある首都カイロに同行しました。

　そしてそこで私が目の当たりにしたのがカイロ郊外にある「死人の町」だったのです。

――死人の町？

西水　大理石造りの霊廟が並ぶイスラムの墓地に、行き場のない人々が住み着いてできた貧民街のことです。

　「死人の町」の路地を歩いていると、疲れ切った様子の女性が目に留まりました。彼女は病気の幼子を抱えていたのです。彼女を慰めながら、その子を抱き取った瞬間、言葉を失いました。その子のあまりもの軽さに……。

　ナディアという名のその女の子は、それから間もなく私の腕の中で息を引き取りました。すーっと魂が抜けて軽くなるようなあの感覚は、いまも体が覚えています。

――ナディアは重い病に侵されていたのですか。

西水　死因は下痢からくる脱水症状でした。

――え？　脱水症状で。

西水　安全な飲み水としっかりした衛生教育があれば十分防げるは

ずです。でも、貧民街ではそれさえままならない。

「死人の町」からは高級マンション群が一望できました。ちょうど夕暮れ時で、マンションの窓にはキラキラと光るシャンデリアが映り、その下の道にはヘッドライトをつけた黒塗りの高級外車が行き交う……。

――凄まじいギャップですね。

西水　だからこそ、一瞬、私は気が狂ったと思います。天に向かって何かを叫んだ記憶はあるのですが、実際何を言ったのかは全然記憶にありません。凄い怒り。ぶつけようのない怒りでした。

体験を通じて学び仕事に命を吹き込む

――この時の出来事が世銀に入られるきっかけだったと。

西水　ただ、実際決断するまでには悩みました。エコノミストとして大成したいという思いもありましたから。

でも、衝撃的な体験をしてしまった私には、またプリンストン大学に戻って、裕福な家庭の子女たちに経済学を教えることはもうできないと思ったのです。世銀の一員として貧困と闘うのが自分の使命だと覚悟を決めました。

――ご自身の使命だと。

西水　そもそも世界銀行というのは、第二次世界大戦後に再び世界が経済危機に陥ることがないようにと、戦後復興と、経済発展、通貨の安定などを主な目的として、国際通貨基金（ＩＭＦ）とともにつくられた国際機関です。

ＩＭＦは、強いて言えば外科医です。世界各国の短期的な動向を見極め、もし危機的な状況が起きればすぐに介入する。いってみればがん細胞を切り取るようなことです。

――分かりやすい譬えですね。

西水　一方、世銀は、地域診療所だと考えてください。国家経済が重い病に陥ることがないように、国の構造的な問題の解決に向けて提言し、長期改革を支援していく。それが世銀の主な役割です。

貧困のない世界をつくるという使命を掲げる世銀で、それからの二十三年間、私は様々な国や地域と関わりました。

ただ、エコノミストとして世界の貧困解消に向けて懸命に取り組んでいたつもりだったのですが、貧困の意味を本当に知ったのは入行から約十五年も経ってからのことだったのです。

――どういうことでしょうか。

西水　あるＮＧＯ団体の方から貧困はそこに一度でも住んでみなければ分かりませんよ、と言われたのです。

世銀の管理職の人間が着の身着のままで途上国の貧しい家に家族の一員としてホームステイしたのは、たぶん私が初めてでしょう。凄いショックを受けました。自分はこの十五年間貧困解消と声高に叫びながら、何も分かっていなかったじゃないのと。

――それほどの体験をされたと。

西水　ホームステイ先のお母さんは生活をともにする中で苦しい胸のうちを話してくれました。ここは人間が生活を営む場所ではなく、動物のようにただ体を生かしているだけで、希望や夢はおろか、何かを望むことさえ許されない。生きながらえるための生活を、とにかく死ぬまで続けなければならないのだと。

当時の私は局長という融資を手掛ける世銀の花形管理職で、仕事が楽しくなってきた頃だっただけにショックも大きかったのです。

この体験を通じて、貧困に喘ぐ人たちの苦しみと我が身を重ね合わせることができなければ、世銀で働いていく資格はないと悟りました。ですから、この体験を境に部下を集めてはっきり言い渡しました。「要注意。君たちが知るミエコはもういない」と。

――常に体当たりで仕事に当たってこられたわけですね。

西水　様々な国を訪れる中で、その国の歴史を踏まえて政治を見極めなければ、エコノミストとして政策を分析することができないということも学びました。ですから、関わりのある国の歴史はよく勉強しましたね。大学にとどまったままのエコノミストに比べて、政策に対する考え方が、より現実的になったと思います。人生、すなわち学習です。

いまは、例えば日本に向けて新聞のコラムなどで情報発信をしていますが、私のような者に付加価値があるとすれば、「よそ者」の視点でしょう。人と違った観点を提供できることだと思うので、それが何かのお役に立てばと願っています。